

アイヒェンドルフの『予感と現在』 における女性像について

—— イーダとローザを中心に ——

丹 治 道 彦

はじめに

アイヒェンドルフの『予感と現在』（1812年成立 1815年出版）に一つのメルヒェンが挿入されている。¹⁾ このメルヒェンの主人公イーダのたどる末路が『予感と現在』の主要な登場人物の一人であるローザの運命を暗示していることは、すでにアルブレヒト・シャウが指摘している。²⁾ このことはイーダ・メルヒェンが語られる状況の設定からも明らかであるが、詳細に検討すると二人の人物の造形に大きな類似点が見出される。それは、この二人がともに十九世紀初期の新しいタイプの女性として描かれているということである。『予感と現在』が執筆されたのは、フランス革命に象徴されるように古い社会秩序が崩壊し新しい社会が作られつつある激動の時代であった。本論文は、そのような時代を忠実に描こうとしたこの小説³⁾ においてローザやイーダのような新しいタイプの女性がたどられた不幸な運命の意義について、若干の考察を試みるものである。その際に手懸かりになるのが、時代批判とキリスト教による救済の視点である。

I イーダ・メルヒェン

隠者のように厳しい懺悔の生活を送る騎士が娘をひとり残して死ぬ。臨

終の床で彼は娘に指輪を与えて遺言する。

「……毎朝正しい心でこの指輪を見つめるんだ。そうすれば、指輪の輝きはおまえの心を励まし元気づけてくれる。けれど、お前の考えや好みがよこしまなことに惹かれれば、指輪の輝きもお前の澄んだ心とともに消えてしまう。……徳を備えた男を見つけるまで、いつもかわらずこの指環を身につけておおき。それを手にした男は二度とお前から離れられなくなり、お前の婿殿になるんだからね。」(III. 40ff.)

ところが娘は父親の遺言には従わない。彼女は驚くほど美しく、求婚する男は後を絶たないが、誰にも指輪を与えない。ある日のこと指輪を見ると暗く不気味な光を放ったので、イーダは指輪を川に捨ててしまう。ところがその翌日、その指輪をはめた騎士(水の精)が来てイーダに求婚する。彼女は恐怖と不安にとられるが、逆らいきれず水の中に引き込まれてしまう。以上がイーダ・メルヒェンの梗概である。

「昔むかし……」という始まり、水の精、魔法の指輪など、イーダ・メルヒェンには、フォルクスメルヒェンに特徴的ないくつかの要素が見出されるが、フォルクスメルヒェンにはない特徴も備わっている。フォルクスメルヒェンの登場人物の描写は具体性に乏しく、内面や周囲の世界をもたず、前世や後世との関係もない。⁴⁾しかし、イーダ・メルヒェンにおいては、主人公のイーダの人物像や祖先との関係がかなり具体的に描写されており、それが物語の中で重要な意味を持っている。父親は懺悔の苦行に日々を過し、娘に殉教の聖者の物語を読んで聞かせるが、彼女は、そのような者たちを本当の愚か者と思い、聖者物語の奇跡を信じる父よりも自分のほうがはるかに利口だと考えている。また、彼女は恐ろしい水の精の話をする年老いた執事を嘲笑する(III. 40.)。彼女の話術は如才なく巧妙で、まるで大人と喋っているような印象を相手に与える(III. 40.)。臨終の父からイーダが受け取った指輪は、それを身につける者の正しい心と引き換えに幸福な

結婚を約束するものであり、イーダの祖先の女たちは皆この指輪をつけて神に結婚を祝福される(III. 40.)。年頃になった彼女はとても美しく、そのため求婚者は後を絶たない。

そのとき彼女は男たちをまったくの馬鹿だと思っていました。彼らは役立たずで意味のない冗談をひっきりなしに飛ばすか、彼女が考えもつかないような崇高なことをしては威張っているかだったからです。こうして彼女は目がくらみ、自分のことを、魔法にかけられた熊や猿たちに囲まれた美しい妖精だと思っていました。この熊や猿たちは彼女の目くばせで踊ったり、かしづいたりしなくてはならなかったのです。(III. 41ff.)

このように男性が自分のもとに集まることは好むが、彼女にとって結婚などは考えただけでも愚かで厭わしいものである(III. 41.)。結婚に対する彼女の考えは以下の言葉に端的に現れている。

「どうして美しい青春をだめにして、人里はなれた退屈な孤独のなかで、かわいそうな家庭の主婦にならなくてはいけないのかしら。今の私は、大空の鳥のようにこんなにも自由だっていうのに。」(III. 41.)

以上のことから、彼女は、キリスト教の奇跡譚や自然の精霊の物語を迷信であるとして信じようとせず、既成の道徳や価値観には囚われない女性であり、信心深い父親や結婚生活に幸福を見出した祖先の女たちとは正反対の人物として造形されていることがわかる。シャウは、そのようなイーダの人物像に、ロマン主義の時代のあまりにも早く解放されすぎた女性の姿を見ている。⁵⁾

イーダ・メルヒェンは因果応報の物語である。父親の遺言に従って身を慎み、徳を備えた立派な男に指輪を与えれば幸福な結婚をすることができたが、イーダは享楽三味の生活を送る。また幼い頃の彼女は、水の精の恐ろしい物語をして聞かせる老執事のことをいつも笑い、ひとりで森を流れ

る川の岸边に立っては「水の精さん、お婿さんになってちょうだい」と言う(III. 40.)。臨終の父から与えられた指輪は、男性を虜にして放さないという魔力を持つと同時に、勤勉で敬虔な人生と神の恵みの象徴であり、持つ者の心を映す鏡である。⁹⁾ イーダは不気味に光る指輪を見て川に投げ込む。このことは水の精への求婚を意味し、彼女はそれまでの行為の報いを受けることになる。

イーダ・メルヒェンに描かれるのはフォルクスメルヒェンの世界であるが、そこに登場する人物、なかんずく主人公は、作者アイヒェンドルフの生きた時代の新しいタイプの女性像を体現するものである。そして、その新しさのゆえに主人公が没落する点に、このメルヒェンの持つ時代批判としての意義がある。

II イーダ・メルヒェンの状況設定

イーダ・メルヒェンは典型的な粹物語の構造によって語られる。聞き手による物語の中断や物語の終わった後の聞き手の反応は、聞き手の性格を規定し内部物語が粹世界において持つ意味を示す伝統的な手段である。⁷⁾ イーダ・メルヒェンは、フリードリヒが友人のレオンティンや詩人のファーバー、レオンティンの妹のローザと旅に出た際に、ローザの退屈をまぎらわそうとしてファーバーが語るものである。『予感と現在』にはローザの他にも、ロマーナなど何人かの不幸な結末を迎える女性が登場する。⁸⁾ しかし、イーダ・メルヒェンが語られる時点において、それらの女性はまだ登場していないか、その場にいたとしても言及されていないかのどちらかである。したがって、ファーバーが語るメルヒェンの聞き手として設定されている女性はローザのみということになる。

そのローザが三回にわたってファーバーの物語を中断させる。まず、ファーバーが物語を始めた直後に「昔話みたいに始まるのね」(III. 39.)と

言い、次にはイーダが聖者の画像に髻の落書きをするところで声をあげて笑う(III. 40.)。また、父親が死んでイーダが自分の生き方を変えるくんだりでは、「ああ助かったわ。だって、この子いままでほんとにとっても退屈だったんですもの」(III. 41.)と言う。第二、第三の中断はイーダに対するローザの共感を示すものであり、⁹⁾ ファーバーの物語が終わるとローザは黙ってしまふ。ファーバーの物語をきっかけにフリードリヒとレオンティンが物語をしても、ローザはうわのそらである(III. 45.)。また、ファーバーがこのメルヒェンを語っているあいだ、フリードリヒは何となく痛ましい感情でローザのことを思わずにはいられず、ファーバーが明らかに意図してこの物語を選んだとの思いを禁じえない(III. 45.)。

唯一の女性の聞き手として設定されているローザは、三回にわたって物語を中断させ作中人物のイーダに共感を示すが、彼女の最期を聞くと黙りこんでしまふ。また、物語を聞いているあいだローザのことを思わずにはいられなかったというフリードリヒの反応からも、イーダ・メルヒェンは『予感と現在』におけるローザの運命を暗示していることがわかる。

III ローザについて

ドナウ河を下る舟の上でフリードリヒはローザの姿を見る。ローザは盗賊に襲われて傷ついたフリードリヒを介抱し、兄レオンティンの城へ連れて来る。その城から旅行に出た際、彼女は途中で姿を消しA氏の領地に滞在していたフリードリヒを手紙で首都に呼ぶ。フリードリヒはローザを愛しているが、彼が首都で政治改革のサークルの活動に没頭して会うのが稀になると、彼女は貴族の社交界に頻繁に出入りして、色男の皇太子に誘惑される。彼女は不安に囚われて抵抗するが、逆らいきれずに皇太子と結婚する。そして、小説の結末で、ローザは教会で懺悔をしているが、フリードリヒの姿を見ると気を失ってその場に倒れてしまふ。

IIで述べたように、イーダ・メルヒェンはローザの運命を暗示するものであるが、それにとどまらず、ローザとイーダの二人には共通点が多い。それを見出す手懸かりはローザとフリードリヒの関わりに求められる。

第一には、フリードリヒの生い立ちの話に対するローザの反応である。ファーバーがイーダ・メルヒェンを語った日の夕方、フリードリヒはローザに自分の生い立ちを話して聞かせる。話を聴くローザは幾度か先を促す間の手を入れるが、それと並んで三回にわたってフリードリヒの話を中断する。

「……ぼくはじっと耳をそばだてて聴いていた。……その男が読んでいたのは不死身のジークフリートだったんだ。」

ローザは笑った。——話を少し妨げられたが、フリードリヒは語り続けた。(III. 53.)

「……そこでぼくは庭にひとりぼっちで座って、マゲローネやゲノフェーフアやハイモンの子供たちやなんかを飽きもせずにも読んだものだ。……」

ローザはまた笑った。フリードリヒはしばらくの間、不機嫌に黙っていた。(III. 53.)

「……それ(キリストの受難物語)¹⁰⁾がぼくの全存在を満たし、貫きとおした。このことをみんな知ってるぼくの家教師や家の大人たちが、どうしてぼくのように感動しないで、いつもながらのやり方で落ち着いて生きていられるのか、ぼくにはわからなかった。——」

ここでフリードリヒは不意に話すのをやめた。ローザがすっかり眠りこんでいたのに気づいたからである。このとき、彼は悲しみとともに不快感を覚えた。(III. 55.)

古い時代の伝説を描いた民衆本との出会いによってフリードリヒは文学に開眼したが、フリードリヒがその題名を具体的に挙げると、ローザは彼の

話を笑いで中断する。また、キリストの受難の物語を読んだ感動をフリードリヒが語る時、ローザはすでに眠り込んでいる。民衆本および受難物語との出会いは、敬神の念に篤く武勇を尊ぶという中世の騎士の理想を體現した人物、そして詩人となったフリードリヒの原体験であり、彼にとって少年時代の回想の中でも最も重要なものに属する。¹¹⁾そして、ローザがフリードリヒの話をもさにその読書体験の箇所でも中断することは、フリードリヒに大きな影響を及ぼしたキリストの受難物語や中世の伝説などに対するローザの無関心、それらを尊重するフリードリヒへの軽蔑を示しており、二人が結ばれぬままに終わることをも暗示している。

第二に、首都でのローザとフリードリヒの関係を検討してみると目を惹くのは、ローザに翻弄されるフリードリヒの姿である。首都に着いたその晩にフリードリヒはローザを訪ねるが、彼女は舞踏会に出かけて留守である。彼女の後を追って舞踏会に行くが、彼はローザと接触することができない。あるお茶の会でフリードリヒがロマーナと話合っているのを見るとローザは彼女に嫉妬し、フリードリヒにはげしく抱きつき「愛してるの」と言う(III. 159ff.)。しかし、偶然に来あわせた別の舞踏会でフリードリヒは皇太子と一緒にローザを見るが、そのとき彼女は勝ち誇ったような目つきでフリードリヒの方を見る(III. 177.)。またあるときは、フリードリヒを自宅で待つと言いながら約束を破って舞踏会に出かけてしまい、後を追って行ったフリードリヒは皇太子と踊る彼女の姿を見る(III. 188.)。

そこには森の中に哀れな裸形のゲノフェーファが立っていた。彼女の前にはのろ鹿がひざまづき、その背後には馬を連れて狩人やホルン吹きを従えた方伯が立っている。数えきれない小鳥が木の枝にとまって、きらきらと羽ばたいている。ゲノフェーファはとても美しく、太陽ははなばなしく輝き、……天も地も歓喜と恍惚とに満ちあふれている。

(III. 187ff.)

そのときフリードリヒは、自分が手に入れた古い絵を二人で鑑賞しようと約束しており、絵の持つ意味や故事来歴をローザに聞かせるのを楽しみにしていた。この引用は、すでに誰もいなくなっているローザの部屋でフリードリヒが開いた持参の画集の描写である。『ゲノフェーファ』は、トリアの方伯ジークフリートの妻ゲノフェーファが、夫の十字軍遠征中に佞臣ゴローの誘惑を拒んだためにかえって不義密通の罪をきせられて放逐されるが、神の加護のもとに七年間を森の中で過ごし、疑いが解けて晴れて夫と対面し幸福で敬虔な余生を送る、という物語であり、引用した絵の描写は狩に出た夫のジークフリートが森に暮らす妻を捜し当てたときの情景である。まるで今日描かれたばかりのようなこの絵の色彩にフリードリヒは感動するが、彼の心を動かしたこの絵もローザにとっては舞踏会にまさる魅力は持っていない。また、『ゲノフェーファ』は代表的な民衆本の一つであり、その貞淑のゆえに神の祝福を受けた聖女の物語であるだけに、民衆本によって文学に開眼し、受難物語との出会いから熱烈な信仰を持つに至ったフリードリヒにとっては、二重の意味で自己の存在の根幹に関わる物語である。彼の人生の信条に対してローザが理解を示そうとしないことは、その生い立ちの話に対する彼女の反応からも、すでに明らかである。そして、フリードリヒがローザのもとに持参した画集の中から作者によってことさらに示されたこの絵が、聖女ゲノフェーファの物語にちなんだものであるだけに、フリードリヒの信奉する生き方やキリスト教の説く貞淑の美德や結婚の幸福に対するローザの無関心が、ここでさらに強調される。さらに、ローザの描写にたびたび使われている *hartes Köpfchen* (III. 35.), *Hartnäckigkeit* (III. 35.), *Leichtfertigkeit* (III. 62.), *leichtfertig* (III. 188.) などの語¹²⁾ も彼女に否定的なイメージを与えている。

以上のように見てくると、フリードリヒを翻弄しつつ皇太子とつきあうローザの姿には、周囲に集まる多勢の男を自分の意のままにあやつること

を好むイーダのそれとが重なってくる。その後、ローザは皇太子の誘惑に逆らいきれずに彼と結婚する。皇太子は、フリードリヒが首都で出入りした政治改革のサークルのまとめ役であるが、首都の貴族の社交界には常に彼の姿があり、典型的な社交界の色男として描かれている。旅の途中からローザに連れられて首都へ行くローザの馬車をはるかに見送りながら、フリードリヒは首都を墓石に、ローザを自分の墓へと下りて行く死の花嫁にたとえる (III. 62ff.)。この箇所は、イーダ・メルヒェンとともにローザのたどる運命を暗示している。最後の場面でローザは教会で懺悔をしており、フリードリヒの姿を見て気絶する。水の精の花嫁となって川へ引き込まれるイーダの末路や、死の花嫁というフリードリヒの言葉を考えるならば、結末におけるこのようなローザの姿は決して幸福とは言えないであろう。

IV 時代批判と救済の視点から

『予感と現在』については、詩やエピソードの過度の挿入によって筋が見失われる危険があることなど、従来から否定的な評価が繰り返されてきた。¹³⁾ これに対して、時代批判の視点はこの作品を積極的に評価しようとする視点の一つで、この小説の中に執筆当時の社会状況とそれに対する作者の態度を読み取ろうとするものである。¹⁴⁾

この小説の第二部では、ローザの後を追って来たフリードリヒの目を通して、首都の貴族社会、ことに社交サロンに集まる貴族たちが批判的に描かれている。¹⁵⁾ アイヒェンドルフは1809~1810年にかけてベルリンに滞在して同地のザンダー夫人のサロンにも出入りしており、『予感と現在』第二部における首都の描写はこのベルリン滞在の折の体験がもとになっている。菊盛英夫氏は『文芸サロン』において、ロマン主義時代におけるベルリンの文芸サロンの成立の要因の一つとして、啓蒙主義の唱える婦人解放

の理念を挙げている。氏によれば、このベルリンのサロンで結婚から解放された新しい婦人の理想が打ち出され、サロンの女性たちによってその理想が体験的に実行に移されている。¹⁶⁾

IとIIIで検証したように、イーダとローザは、キリスト教の説く道徳や倫理に理解を示さず自分の思うままに生きる女性として造形されている。ここで注意しなくてはならないのは、ローザが都市の貴族社会に属し社交サロンに出入りする人物だということである。本論考では言及しなかったが、男性を誘惑し破滅に導くという属性から異教の魔女ヴェーヌスにたとえられるロマーナ¹⁷⁾もまた才気煥発で奔放に生きる女性であり、社交サロンの人物として描かれている。ローザの運命を暗示するイーダはメルヒェン世界の人物であるが、多くの男女を集めて機知に富む会話を楽しむ彼女の姿(III. 42)には、サロンの女主人を見ることが可能であろう。

大都市は古く力強い流れをその機械や歯車に受け止めた。……ついには流れは枯れてしまい、衰れた工業社会の生活は乾ききった川床に思いつ上がった絨毯を広げるが、その裏側は厭わしく無色の糸からできて
いる。(III. 179.)

アイヒェンドルフは作中で、大都市を時代を映す最も忠実な鏡であると言っているが、その外見は華やかであるが内実は空虚なものであるとしていることは注目に価する。また、その大都市のサロンに集まる女性たちについてフリードリヒは以下のように言う。

「……あの有名な学校では虚栄と救いがたい模倣癖ですべての少女の子供らしい特性を一般化し、だめにしてしまうだけです。あわれな魂は、誰にでもあてはまらなくてはならない型に従ってしつけられ、型にはめられて、しまいには中身のない型以外には何も残らなくなってしまいます。……」(III. 74.)

これは、社交に必要なことを学ばせるために姪を首都の教育施設に入れる

べきだった、と嘆くユーリエの伯母に対する答えである。また、A氏の館でフリードリヒはローザからの手紙を受取る。この手紙でローザは、自分が首都の社交界に出入りしていること、フリードリヒがA氏の館、つまりユーリエのもとに滞在しているのを知ってフリードリヒに対して嫉妬したことなどを述べ、彼も首都に出てくるようにと結んでいるが、主人公が手紙を読み終えた直後に以下の記述が見える。

手紙全体が、享楽に息の詰まった人間が束の間に投げたように、その者の生活の空虚を示していた。そしてその空虚を通して、よそよそしく埃っぽい風が彼に吹きつけた。(III. 113.)

首都の社交界の女性は、ローザやイダに見られるように、既成の道徳や倫理に拘束されぬ人物として描かれているが、そのような女性たちの精神の空虚さを主人公が批判していることは、見過ごされるべきではない。

また、キリスト教による救済を暗示する風景の描写が何度か現れることもこの小説の特徴である。

流れの中央には奇妙な形の岩があり、そこから十字架が慰めと平安に満ちて、猛り狂う水がぶつかりあうのを見下ろしている。……人ひとり見えず鳥の鳴き声も聞こえず、山々を覆う森と、すべての生きとし生けるものを底知れぬ淵へと引き込む渦とだけが、何百年ものあいだ単調にざわめいている。渦は時おり死の眼のように暗く光ってその口をあける。すると人間は敵意に満ちた底知れぬ自然の力の中に不意に投げ出されたように感じる。そのとき岩の上の十字架が神聖かつ重大な意味をもって立ち現れるのである。(III. 4.)

これは学業を終えて旅に出た主人公がドナウ河を舟で下るときの描写であるが、¹⁶⁾ 彼が独立戦争に敗れて生まれ故郷にたどりついたときに、以下のような風景が描かれる。

彼（フリードリヒ）は思いに満ちて石の墓標に腰を下ろし、谷を見下

ろした。下界はいくつかの色のかたまりに分かれて入り組みあい、町の塔や村がゆっくりと沈んでゆき、凪いだ海面のように静かになった。山上の十字架だけが、まだ長いこと金色に輝いていた。(III. 278.)

主人公の遍歴の出発点と終着点という重要な箇所にはキリスト教による救済の可能性を示す描写が現れることは、主人公による首都の貴族社会の批判が主としてキリスト教信仰の観点からなされることと共に¹⁹⁾この作品の宗教色を非常に強いものにしてている。

この論文の冒頭で述べたとおり、『予感と現在』を解放戦争直前の時代の忠実な鏡にすることが、作者の意図であった。その小説において時代の流れを最も忠実に映すといわれた都市の生活は、外見は華やかであってもその実態は空虚なものであり、その住人も主人公によって内面の空虚さを批判される。このような中で、キリスト教による救済を暗示するような部分が作品の重要な箇所に現れる。このことから、当時の時代状況から生ずる精神の空虚を埋めるものとして筆者がキリスト教信仰を考えていたことが読み取れる。そして、その作品の中で解放された女性として描かれる登場人物については、その精神の空虚さがキリスト教信仰との関係において批判的に描かれている。このような女性たちが、決して幸福とは言えない結末を迎えるということは、激動の時代における精神の空虚さを埋めるものとしてのキリスト教信仰の必要ということを示し、否定的な側面から表しているように思われる。

使用テキスト

Eichendorff, Joseph Freiherr von : Sämtliche Werke. Hist.-krit. Ausg. Regensburg (Habel) 1908ff. Neue Edition. Stuttgart (Kohlhammer) 1962ff.

アイヒェンドルフ(神品芳夫訳)：フリードリヒの遍歴〔世界文学全集 9〕(集英社) 昭45(1970) p.5-288.

引用には批判校訂版全集を用い、ローマ数字で巻数を、算用数字でページ数を示し

た。なお、引用部分の翻訳に際しては、神品芳夫氏の上記の翻訳を参照させていただいた。

参考文献

- Zons, Reimar-Stephan: „Schweifen“. Eichendorffs „Ahnung und Gegenwart“. In: Eichendorff und die Spätromantik. Hrsg. v. Hans-Georg Pott. Paderborn (Schöningh) 1985. S. 39-68.
- Hoffmeister, Gerhard: Nachwort zu: Ahnung und Gegenwart. Joseph von Eichendorff. Hrsg. v. Gerhard Hoffmeister. Stuttgart (Reclam) 1984. S. 181-204.
- Schwarz, Egon: Joseph von Eichendorff: Ahnung und Gegenwart (1815). In: Romane und Erzählungen der deutschen Romantik. Hrsg. v. Paul Michael Lützel. Stuttgart (Reclam) 1981. S. 302-324.
- Schau, Albrecht: Märchenformen bei Eichendorff. Freiburg i. Br. (Beckmann) 1970.
- Eichendorff, Karl Freiherr von: Ungedruckte Handschriften Eichendorffs. In: AURORA 5. Oppeln (Der Oberschlesier) 1935. S. 9-17.
- Selbmann, Rolf: Der deutsche Bildungsroman. Stuttgart (Metzler) 1984.
- Lüthi, Max: Das europäische Volksmärchen. 8. Aufl. Tübingen (Francke) 1985.
- Kayser, Wolfgang: Das sprachliche Kunstwerk. 19. Aufl. Bern (Francke) 1983.
- 吉田国臣: アイヒェンドルフの長編小説——受容と研究史——: 上智大学ドイツ文学論集(上智大学ドイツ文学会)第21号(1984) p. 127-142.
- 丹治道彦: アイヒェンドルフの『予感と現在』に関する試論——キリスト教と異教——: 東北ドイツ文学研究(東北大学文学部・ドイツ文学研究会)第32号(1988) p. 38-53.
- 菊盛英夫: 文芸サロン(中央公論社)昭54(1979).

註

- 1) Vgl. Schau. S. 53.
このメルヒェンは独立した作品ではなく題名がないので、上記の参考文献に従い、主人公の名をとってイーダ・メルヒェン(Ida-Märchen)と呼ぶ。
- 2) Vgl. Schau. S. 53ff.
- 3) Vgl. Eichendorff, Karl Freiherr von. S. 10ff.
アイヒェンドルフが『予感と現在』の出版を仲介したフケーの依頼に応じて送った序文は、カール・フォン・アイヒェンドルフにより1935年 „AURORA“ 第五号誌上で公開された。そこには、フランス軍のロシア侵攻以前にこの小

説が完成されたこと、作者がこの小説で解放戦争直前の期待と憧憬と混迷に満ちた重苦しい時代を忠実に描こうとしたことなどが述べてある。

- 4) Vgl. Lüthi. S. 13.
- 5) Vgl. Schau. S. 55.
- 6) Vgl. Schau. S. 58.

シャウはこの論文で、愛の絆としての指輪のモチーフが、イーダ・メルヒェンだけでなく梓にあたる『予感と現在』の中にも何箇所か見出されることを指摘しており、1809年にアイヒェンドルフが故郷のルーボヴィッツで収集したオーバーシュレージエンのメルヒェンにおいても指輪は愛の絆として重要な役割を演じていることを報告している。

- 7) Vgl. Kayser. S. 202. und III. 399.
- 8) Vgl. Schwarz. S. 311ff.

シュヴァルトツは、水の精によって川に引込まれるイーダの運命とこれらの女性の不幸な結末の並行関係を指摘し、館に火をかけて自殺するローマーナを四大元素による女性の破滅のさらなる例としてあげている。しかし、登場人物の運命の暗示という点から言うならば、ローマーナのそれはキリスト教の光明を浴びて石と化すギリシャの女神を彼女が演じた活人画 (III. 139ff.) に求められるべきである。イーダの末路は、より直接的にはローザの運命を暗示するものとして捉えるべきであろう。

- 9) Vgl. Schau. S. 69.
- 10) 引用文中の括弧内の註記はすべて本論文の筆者による。以下同様。
- 11) 拙稿. p. 39-40. を参照。
- 12) ローザのもとにいたいがために、旅に出ようというレオンティンからの誘いをフリードリヒが断ったのを知りながら、ローザはレオンティンに同行をせがむ。この彼女の態度を表現するのが *hartes Köpfchen* と *Hartnäckigkeit* という語である。またローザは旅の途中からローマーナに連れられて首都へ行くが、その際ローザはいとも簡単にフリードリヒと別れてしまう。この行動を表す語が *Leichtfertigkeit* である。さらにフリードリヒが、自分と会う約束を破って舞踏会に行ってしまったローザを追いかけて来た際、皇太子に笑いながら話しかけるローザを見る。このローザの様子を表現するのが *leichtfertig* という語である。
- 13) Vgl. XVIII/1. 74ff.
このような批判は、1819年2月にハレで発行された「一般文芸新聞」(Allgemeine Literatur-Zeitung) にすでに見られる。
- 14) Vgl. XVIII/1.78ff.

吉田, p. 131. を参照。

この視点も、1819年8月にブレスラウで出た「シュレージエン地方新聞」(Schlesische Provinzialblätter) にすでに見出される。当時の上層社会の空虚な営みさえ忠実に描かれていると同紙の匿名の批評は伝えている。なお吉

田氏によれば、リーライは『予感と現在』は登場人物や筋の展開に1811年当時の宗教的状况とロマン主義文学の様々な様相を投影させたものであるとして、個別にその対応関係を論じている。

15) 拙稿. p. 42-43. を参照。

16) 菊盛. p. 166. を参照。

17) 拙稿. p. 44-48. を参照。

なお、Schwarz (S. 317.), Zons (S. 63.), Hoffmeister (S. 393.) などの諸家にこの見解が見られる。

18) Vgl. Schwarz. S. 313ff.

シュヴァルツは、このキリスト教による救済の寓意が小説全体を規定すると言い、単なる風景描写がそのような寓意をもつ理由として、この場所に対する herrlich と wunderbar, 十字架に対する Trost- und Friedenreich という形容を挙げる。

19) 拙稿. p. 42-43. を参照。

Frauengestalten in Eichendorffs „Ahnung und Gegenwart“

— Mit dem Schwerpunkt auf Ida und Rosa —

Michihiko TANJI

In Eichendorffs Roman „Ahnung und Gegenwart“ ist ein Märchen eingelegt, dessen Heldin Ida ein unglückliches Ende nimmt. Es ist aus der Erzählsituation klar, daß der Untergang von Ida das Schicksal Rosas andeutet. Wenn man diesen Roman noch genauer liest, findet man eine große Ähnlichkeit der Darstellungen von Ida und Rosa. Sie sind beide nämlich als emanzipierte Frauen dargestellt. In dieser Arbeit kommt in Betracht, was für eine Bedeutung ihr unglückliches Ende hat.

Idas Vater gibt ihr im Todesbett einen Ring, der fortglänzt, solange sich ihre Neigung zum Bösen nicht wendet. Sie soll ihn mit rechtem Sinn betrachten, bis sie einen tugendhaften Mann findet. Der Mann, dem sie ihn gibt, kann sie nicht mehr verlassen. Ida verachtet aber den christlichen Glauben ihres Vaters, und jeder Gedanke an die Ehe ist ihr lächerlich und verhaßt. Nach dem Tod des Vaters sucht sie also nur nach dem weltlichen Vergnügen. Eines Tages wirft sie den Ring, der schon seinen Glanz verloren hat, in den Fluß hinein. Das bedeutet aber den Heiratsantrag an den Wassermann. Sie wird infolgedessen als seine Braut ins Wasser hinabgezogen. Das Ida-Märchen stellt eine typische Märchenwelt dar. Seine Hauptfigur ist dagegen, sagt Albrecht Schau, als eine befreite Frau zur Zeit der Romantik geschildert.

Rosa wird wie Ida als eine von christlicher Moral befreite Frau dargestellt. Friedrich, der Held dieses Romans ist im Gegenteil ein gläubiger Adeliger und Dichter. Vom christlichen Glauben ist stark bestimmt, was er ist. Rosa versteht das Lebensideal ihres Geliebten

nicht und führt ihn an der Nase herum. Je seltner sein Besuch wird, desto häufiger besucht sie die Gesellschaftskreise. Dort wird sie vom Prinzen verführt, der „gefallen“ genannt wird, und heiratet ihn. Am Ende des Romans legt sie in der Kirche die Beichte ab. Und als sie Friedrich erblickt, fällt sie ohnmächtig auf den Boden nieder.

„Ahnung und Gegenwart“ wurde 1812 vollendet. Damals lag Europa in großer Veränderung, wie sie die Französische Revolution symbolisiert. Dieser Roman wollte, sagt Eichendorff im Vorwort, ein getreues Bild der Zeit vor dem Befreiungskrieg sein. Im Roman steht, daß der Weltmarkt großer Städte der getreueste Spiegel der Zeit ist. Im zweiten Buch dieses Romans werden die Gesellschaftskreise der Adligen in der Residenz kritisch dargestellt. Wie Ida und Rosa sind die adligen Frauen in der Residenzstadt von der traditionellen Sittlichkeit frei. Friedrich kritisiert merkwürdigerweise die innere Lücke dieser Frauen im oberflächlich prächtigen Leben. Daneben ist es auch wichtig, daß man an mehreren Stellen des Romans die Landschaftsschilderung findet, die die Erlösung durch das Christentum andeutet. Diese Schilderung ist besonders am Anfang und am Ende der Wanderung des Helden eingefügt. Das verstärkt neben der Kritik der stadtadligen Gesellschaftskreise, die Friedrich vom Standpunkt des christlichen Glaubens ausmacht, die Religiosität dieses Romans. Man kann daraus folgern, daß Eichendorff behauptet, der christliche Glaube gebe zur Zeit der großen Veränderung eine Möglichkeit gibt, die Lücke des Inneren zu erfüllen. Das unglückliche Ende der emanzipierten Frauen bestätigt von der negativen Seite diese Behauptung.

